

砂上の安心網~線引きに惑う 1

道真 HAKUSHIN

などについて、世界中から意見を募り始めた。

過剰規制の見直しは、日本の金融庁や銀行界がかねて主張してきたところだ。金融システムの安定

終末期は一般的に治る可能性がなく、間近に死が迫った状態を指す。記者(34)は大学生だった12年前、肝臓がんで父親を亡くした。享年55歳。

がんが見つかった時は末期だった。過度な延命治療で医療費が膨らむのは反対だ。ただ、どこで線引きをすればいいのか。父の最期を思い返しながらかある家族を取材した。

「胃ろうを選んだのは正しかったのか」。2014年、難病で妻を亡くした山口県岩国市在住の森山俊一さん(82)は今も悩む。胃に穴を開け、管で栄養を送り込む胃ろうによる延命治療を、妻の玉枝さんは死に至るまでの3年間、続けた。

玉枝さんは筋力が徐々に衰えていく病气だった。最初に気づいたのは1997年。病院で病気が見つかり、以来、17年にわたり訪問看護や介護を受けて在宅療養する生活が始まった。

「胃ろうを選んだのは正しかったのか」。2014年、難病で妻を亡くした山口県岩国市在住の森山俊一さん(82)は今も悩む。胃に穴を開け、管で栄養を送り込む胃ろうによる延命治療を、妻の玉枝さんは死に至るまでの3年間、続けた。

玉枝さんは筋力が徐々に衰えていく病气だった。最初に気づいたのは1997年。病院で病気が見つかり、以来、17年にわたり訪問看護や介護を受けて在宅療養する生活が始まった。

「胃ろうを選んだのは正しかったのか」。2014年、難病で妻を亡くした山口県岩国市在住の森山俊一さん(82)は今も悩む。胃に穴を開け、管で栄養を送り込む胃ろうによる延命治療を、妻の玉枝さんは死に至るまでの3年間、続けた。

伴侶の延命 悩みながら



森山俊一さん(左)は妻の玉枝さん(故人)を在宅介護で支え続けた(山口県岩国市)＝森山さん提供

時間がたつにつれ、手れない」。俊一さんは可くなつたらすべてやめた。この時点で終末期だ。母はあきらめなかつたのだと思う。

「やれた方がいい」と説明した。母はあきらめなかつた。評判のよい病院を探し手術を受けさせ、民間療法も試した。それでも05年4月、医師から余命1カ月の宣告を受けた。今、最期まで自宅で待つ森山さん一家へ

「胃ろうを選んだのは正しかったのか」。2014年、難病で妻を亡くした山口県岩国市在住の森山俊一さん(82)は今も悩む。胃に穴を開け、管で栄養を送り込む胃ろうによる延命治療を、妻の玉枝さんは死に至るまでの3年間、続けた。

「胃ろうを選んだのは正しかったのか」。2014年、難病で妻を亡くした山口県岩国市在住の森山俊一さん(82)は今も悩む。胃に穴を開け、管で栄養を送り込む胃ろうによる延命治療を、妻の玉枝さんは死に至るまでの3年間、続けた。

「胃ろうを選んだのは正しかったのか」。2014年、難病で妻を亡くした山口県岩国市在住の森山俊一さん(82)は今も悩む。胃に穴を開け、管で栄養を送り込む胃ろうによる延命治療を、妻の玉枝さんは死に至るまでの3年間、続けた。

「胃ろうを選んだのは正しかったのか」。2014年、難病で妻を亡くした山口県岩国市在住の森山俊一さん(82)は今も悩む。胃に穴を開け、管で栄養を送り込む胃ろうによる延命治療を、妻の玉枝さんは死に至るまでの3年間、続けた。

海自、米空母と共同訓練

政府関係者によると、当初は26日までの予定だったが、こうした期限を設定するもよつた。米国のペンタゴン副大統領は22日、同空母を北へ向けて北上している。射撃訓練は、朝鮮労働党の機関紙も随行している。

失言相次ぐ政権「緩みある」73% 共同通信世論調査

共同通信社が22、23両日に実施した全国電話世論調査によると、安倍政権の山本幸三地方創生担当相ら関係による問題発言や、政務官の不祥事が関係者は「短期間で3回訓練するのは珍しい」と話す。北朝鮮への抑止効果は望み薄というのが一般的な見方だ。

名古屋市長に河村氏が4選 任期満了に伴う名古屋市長選は23日投票。河村氏が無所属で現職の河村たかし氏(68)が、いずれも無所属新人で前市長、岩城正光氏(62)と元会社員、太田敏光氏(68)を破り、2011年の出直し選挙を含めて4回目の当選をした。投票率は36.90%だった。

河村氏が進める名古屋城天守閣の本造復元や市民税減税の是非などが争点だった。河村氏が2期8年の実績と知名度の高

カITを使つた医師・介護の連携。自民に介護事業化策を提案したのは理解できる。え、約37万人の入院患者の3割が積極治療をしないデンマークになぞらえれば、日本も1兆円近い終末期医療費の3割程度を減らせるとみる。

「運れ添ってよかった。おまえを残していくのだから心残りだ」と言い残した父。母は父の死後どんな状態でも生きてほしいと願っていた。母は父の死後どんな状態でも生きてほしいと願っていた。母は父の死後どんな状態でも生きてほしいと願っていた。

日本の医療費は年々増え続け、40兆円を超えた。厚生労働省の取材を担当してきた記者は、社会保障制度の持続性を高めるには、医療費の伸びを抑制するしかないと考えている。ただ、どこで死を受け入れるか一直線に線を引くのは難しい。

記者の父もがが見つかったから半年、入院生活が続いた。末期の肝臓がんが分かったのは2004年12月。進行が速く、母は医師から「手術もできず、年を越せないかもしれない」と言われている。

半島に向けて北上している。射撃訓練は、朝鮮労働党の機関紙も随行している。